

③ 71句 「君察我無辜」

72句 「爲我請冥理」

73句 「冥理遂無決」

74句 「自茲長已矣」

亡くなった藤原滋実を通して天の神に自分の無実を世に明らかにしてもらうことを請う。それが、なされなければ、万策尽きるだろうという「絶望感」

このように、三詩を並記して考察すると、①↓②↓③の流れの中で、道真の当時の心情が手に取るように伝わってくる。

つまり、①「484敘意一百韻」で道真の博識を改めて想起させる、古典籍の故人の事跡に拠りながら、二百句という長大な詩句を通して浮かびあがった詩情は、「自分の今の心情を誰とも分かちあえぬ孤独感」であった。だからこそ、古典籍の故人の行跡をひたすら追うしか術がなかったのである。そこにしか、慰撫するものを見出せない、道真の「絶望感」が詩の根底に流れていることを痛感する詩内容であった。

それが②「485秋夜 九月十五日」の律詩で、「十五夜」より想起する昨年までの自分と、今の謫居の身の落差、そして「無実」の自分を誰一人弁護してくれるものを持ち得ぬ、現状への絶望感が①を受けて、改めて詠われる詩内容となっている。そして今回取り挙げた③「486哭奥州藤使君」へとつながっている。

この詩については、「滋実の死を悼むという形を借りて、自分自身を語っていること。そこには策略によって